

# 地域振興のかたち

## ～「ひまわりプロジェクト」の可能性～

中澤 朋代

### 〈 目 次 〉

#### 1、はじめに

#### 2、初年度のプロジェクト発起から実現への経緯

- (1) 発起者の想い
- (2) メンバーの最初の意思決定
- (3) 行政との懇談会
- (4) 交流イベントの設定
- (5) 1年の活動の全貌
- (6) 初年度の検証

#### 3、活動の背景

- (1) 地域の概要
- (2) 活動の関係者

#### 4、2年目以降の展開と課題

- (1) 2年目の課題
- (2) 2年目以降の展開

#### 5、おわりに

## 1、はじめに

本報告書は、2009年から松本市新村地区で始まった地域活動について、発案から推進までの数年間の経緯を記録し、主体となる組織の活性化と地域連携のポイントを整理するものである。地域コミュニケーションから生まれたこの活動は、いずれ地域の元気象徴として継続されていくことであらう。

今回取り上げる事例は、夏に国道沿いの約10haの農地を一面のひまわり畑にして、通りかかる地域の人々や観光客の目を楽しませる地域活動であり、主宰者の間では「新村ひまわりプロジェクト」と呼ばれている。この活動は3年目を迎え、継続するにつれて年々知名度が増し、より多くの訪問者や写真撮影客が訪れ、問い合わせも増えている。開花最盛期には、手作りイベント「ひまわり祭り」に合わせて、ラジオ放送や雑誌、ブログでの紹介など、季節の人気スポットとして地域で認知されるようになってきた。

このプロジェクトを支えているのは、JA松本ハイランド青年部新村支部（以下、JA新村青年部）のメンバーと、松本大学、行政、地域の人々である。こうした地域や関係者のそれぞれの“事情”を押さえながら、自らが等身大で推進できるペースを意識し、協力し合ってきた展開の詳細に視点を注ぎたい。

## 2、初年度のプロジェクト発起から実現への経緯

### (1) 発起者の想い

新村ひまわりプロジェクトは2009年に始まった。発起人はJA新村支部青年部の当時の部長A氏とメンバーのS氏である。A氏は以下のように、当時の動機を話している。

・前年度に地域にJA職員のN氏が中心となり、青年部のS氏が一緒にひまわりを植えたところ、国道沿いであったことからひまわり畑が注目を浴び、なかなかの評判であった。N氏をはじめ農業関係者より、「このままやめてしまうのは勿体ないので、JA新村青年部に継続してみないか」との話があった。ある日の飲み会の席にて「大学との交流も10年の節目だから、そろそろ何かやろう」と持ちかけられたこともあり、支部長として考えるようになった。地域に明るい話題になるので、やる価値があると思った。

一方で、ひまわりを植えた青年部のS氏は、以下のように語っている。

・N氏と一緒にひまわりを撒いて1年栽培してみたので、仲間より栽培の様子が分かっていた。農地を貸しても良いというメンバーが現れたし、播種の機械も手元にあったので、そう難しいことではないと思った。やってみたら楽しかった。農業従事者は普段は家と農場の往復で、地域との交流や反応を得る機会は少ない。注目されるひまわりの活動はやっていて面白味があったし、お世話になっている地域に何かできるような気がした。

農業指導係のN氏の活動は、景観作物であり、搾油できるひまわりの作付けについて研究を重ねながら、長野県中信地域の各地で試験栽培をしていた。その中で活動が地域により継承されたのが新村のひまわりである。A氏とS氏は新村で始めるに当たり、搾油用ひまわりの栽培経験のあるN氏にヒアリングをし、作付した場合の時期や用具、栽培方法、経費計画のための情報を事前に収集した。最初の企画書はJA職員の担当者がまとめた。内容は図1のとおりである。

## 「ひまわり」作付概要

- 1、面積 約2ヘクタール
- 2、種子 昨年採取した種約40キロ（N氏 保有）、10アール・2キロ
- 3、播種時期 7月20日前後
- 4、開花時期 9月中旬（9月19～23日の連休頃を目標）
- 5、切り花用 2000本くらいの作付は可能か
- 6、耕種概要 ・麦後耕起 ・無肥料 ・ロータリーシーダー使用（10ha／種2k）  
・普通型コンバインにて収穫 ・ひまわり油で採算は取れるのか
- 7、その他 市、JA、大学との連携はどうするか

## {N氏メモ}

10a／50～60kgの収量（昨年の収量 1.5haで約1tの収穫量）

ひまわり油 ・種1kgより200cc搾れる

1kg搾るのに150円の経費（N村役場内に機械がある）

300ccのボトル単価70円

刈取…普通型コンバイン（昨年はH農場）、選別…H農場に選別機がある

※参考資料として地域の地図が添付される。4地主、計9枚の田んぼに太線で囲みが引かれ、合計2.11haの農地を作付けする計画が示されている。

## 図－1 企画書

## (2) メンバーの最初の意思決定

企画書はJA新村青年部の2009年4月の総会にて、出席していた10名以上の部員に対してA氏から提案された。その他、企画書に書かれていない内容では、口頭にて資金面の課題が付け加えられている。ひととおりの提案後、A氏がメンバーに意見を求めたところ、直後の反応は概ね以下の通りであった。

- ・我々は専業農家の集団である。各自忙しい中で時間を割いての活動（人件費）が、ボランティアであるのにもかかわらず、作付け経費まで自前であることは個人経営者として負担が大きい
  - ・資金をどう捻出するのか。まずはなんとか立て替えたとして、秋以降にひまわり油の販売により赤字を失くすことが本当に出来るのか
  - ・ひまわりの作付けが天候の具合で予定通りでなかった場合の、負担に対しての補償はどうするか、大学の研究などで（資金を）持ってもらうことはできないか
  - ・作付けは田んぼである。土の質からして種の収量が落ちる可能性がある
- 等々

つまり提案に対しては、開口と同時にほとんどのメンバーが不安を口にし、重い空気が会議室を覆ったような雰囲気であった。メンバーはほとんどが農業経営者であるため、収支の見込みには特に目がいくようで、実際には非常に慎重であった。はじめは期待感を持って話していたA氏も、この段階では資金の確保は明確でなく、徐々に何も言えなくなった。そんな雰囲気の中、同席していた松本大学の教員が場を転換させるコメントをした。S教員はJA松本ハイランド新村支部とは10年来の付き合いで、これまでも学生とともにこの地区やJA新村青年部と活動を続けてきた。

・等身大の活動で、細く長く始めたら良いのでは。できないことがあっても、地域の人に助けを求めることで広がりをもたらす。最初から完全な計画はできないので、大切なことはできることから少しずつ始めることだ

それをきっかけに、会場からは肯定的な意見が出されるようになった。

- ・種を撒くのは問題ない。作業機械もすでにあるものを使えるので、農家であれば栽培活動は気楽にできる
  - ・ひまわり油の販売に可能性をかけよう。油を高く売る、マーケットの調査をするべき
  - ・直売をやりたい。直営のマーケットをひまわりのイベントで持てないだろうか
- (新村には直売所開設の希望があったが、別の地区を優先で開設するため実現は難しそうだった)

不安要素を残したままではあったが、「皆でやるならやってもよい」という同意のもと、最終的にはJA新村青年部として、自前の資金によりこのプロジェクトを推進することで一致した。しかし、プロジェクトが軌道に乗るまでには、まだまだ多くの議論と時間がさらに費やされた。尚、大学からは常時2名の教員が会議に出席していたが、JA新村青年部での意思が共有され、軌道に乗るまで、特に発言は慎重を心がけた。もしも専門家の立場で全国各地の事例を持ち出し、溢れるアイデアを披露したとしても、地域の人が思いつき実践するものでなければ本物の地域活動にはならない。息の長い活動となるためには、大学は活動サポーターとしての立場を明確にし、JA新村青年部が主体となる体制作りを支援するのが最も良い、との認識であった。

### (3) 行政との懇談会

翌5月末には市議会議員の調整により、JA新村青年部と松本市との懇談会が開かれた。その目的は、①松本市の出前講座として実施するもの、②農業政策における諸課題の意見交換、という位置づけであった。大学や地域の人も招かれて出席した。

当日の資料には松本市の農政概要(平成20年度版)が示され、市議会議員からは農の時代へのシフトに向けた提案書が配布された。松本市の営農人口は減少の一途を辿っており、実際の懇談会の内容はこうした松本市の農業の現状を現場から共有し、かゆいところに手の届く政策をしてほしい、という市への要望をヒアリングするものであった。市の職員は庁舎から地域に出る機会が少なく、顔を通じての対話が貴重かつ重要であると発言した。そうした会合の中で、この「ひまわりプロジェクト」が紹介された。青年部からは、「農家の地域活動を支援する事業があるのか」、「地域に直売所を作り、顧客と顔の見える農業をしたい」などの要望が出された。残念ながら直売所の建設や助成金は難しい様子だったが、ひまわりの活動については市の担当者にも認知され、農業従事者の自発的活動として後に広報されるなど、周知に協力を得られる結果となった。

この頃、発起人を中心に、試験的にひまわりを一部播種し、成育状況が実験されていた。順調な生育が確認されると、JA新村青年部のメンバーで7月に予定していた通り、ひまわりの種を機械を使って畑に撒いた。暑く乾燥する時期にも関わらず、しっかりと小さな芽が出て、みるみる葉をつけ、やがて畑はびっしりと緑色になった。ひまわりの背丈は150センチ程に順調に成長し、各茎には一つ二つ大きな蕾がついた。初年度の栽培は成功だった。

### (4) 交流イベントの設定

その年の7月に行われた会議は、「花の里にいむら～秋も！元気だ！にいむらだ！～」をキャッチコピーに、ひまわり畑の付近で来訪者に対してのイベントをどのように行うか、というものであ

った。イベントは当初は全くの白紙であったが、観客と交流することで、プロジェクトに対する地域の反応を、直接感じることができるという期待があった。

満開が見込める日曜日をイベント日と設定し、駐車場はひまわり畑横の松本大学の駐車場を1日解放し、場内にテントを2張り設営、雨天時は中止と計画した。J A新村青年部のメンバーは、それぞれの想いを以下のイベント企画の中に託した。

- ・農産物の直売…各自が農産物を持ち寄って販売
- ・ひまわりの切り花販売
- ・冷やしきゅうり…新鮮なきゅうりに信州産の味噌3種を選んでつける
- ・ひまわりの切り絵…訪れた人全員で一枚のひまわりを描く
- ・トレインギャラリー…園児・来訪者に絵を描いてもらい、後日、松本電鉄上高地線に絵を展示

このうち、冷やしきゅうりと切り絵は大学からの提案であるが、農産物と切り花の直売は、生産者の立場から希望する活動であったため、皆が自ら販売することに賛成した。また、ひまわり畑の沿線の松本電鉄上高地線は地域活動として「トレインギャラリー」という展示を常時行っていた。こうした活動と連携してひまわりの絵を保育園児に書いてもらい、展示してもらおう、というアイデアも出された。連絡役は保育園に子どもを通わせているメンバーが問い合わせを試みることとなった。この活動は保育園の協力は得られなかったが、展示はできたので半分は成功した。公民館への協力も求めてみたところ、ちょうど公民館の主催イベントと重なっており、参加は困難で広報を協力してもらうことになった。また、大学からは新聞コラムへの掲載、会場と物品の貸出し、学生の社会活動としての参画（看板作製、販売以外の当日の運営）を行うこととなった。

イベント当日は快晴だった。この年、前後の日程は9月には珍しく長い連休であったため、開花とともにひまわり畑の認知度は地域や観光客に対して高まってきており、当日はぼちぼち観客の足があった。J A新村青年部のメンバーと学生が朝早くからテントを設営し、イベントブースへの来訪を待っていた。ところが、国道は渋滞であるに関わらず、より奥にあるひまわり畑とイベント会場に気付く訪れる車は少なげだった。学生たちが手持ちの看板を持って、国道にひまわり祭りの告知を始めたところ、徐々ではあるが車が会場に誘導された。それを見たA氏他数名が「我らも」と、自ら看板を持って国道に向かった。顔の知れた土地で、道路に立ってイベントのPRをしている様子は、会議の慎重な姿勢とは異なり、積極性と情熱が感じられた。

この日のイベントは7割程度の農作物が売れ、手作りのイベントは何とか形になった。しかし何より、メンバーが顔を突き合わせて実践したことや、観客とふれあい、生の声を聞くことができたことは、その後の展開にとって大変に良い影響があったと思われる。



図－2 集合写真



図－3 イベントの様子

### (5) 1年の活動の全貌

初年のひまわり畑は全体が見事に開花、見頃には晴天が続いて栽培計画は成功を収めた。種の収穫は10月で、全体の正味量は軽トラックに2杯分程度の収量だったが、うち半分は雨天の後数日で未乾燥のまま収穫したため、品質が落ちて食用油としての搾油ができなかった。搾油への選別はJ A新村青年部のメンバーが集まり、昔の農機具「とうみ」を持ち出して手作業で1日かけて行った。この時、収量を正確に計量していなかったことは今後の課題となった。食用油は翌年3月になってようやく350mlボトルに400本が生産できた。翌2010年春には手作りのラベルを貼り、農協売店、大学のイベントなどで販売することとした。生産、加工のタイミングが翌年にずれこんだことで、懸案となっていた活動経費については全て赤字のまま持ち越された形であったが、すでに誰もこのプロジェクトの継続に反対する者はなかった。

### (6) 初年度の検証

以上が初年度の主な成果であるが、このひまわりプロジェクトの活動発起時は何が起こっていたのであろうか。まず前提として、以下の条件があった。

#### ①メンバー同士に信頼関係がある

J A新村青年部は行事も多く、全員が顔見知りであること。また、大学側も教員が10年にわたり交流事業や交流会など細く長く続けてきたため、お互いに信頼関係がある。

#### ②定期的にメンバーの集まる機会がある

J A新村青年部には総会や定例会がある。また、大学とはひまわりプロジェクトの他に別の共同事業があり、全員が集まる機会を多く持っている。

#### ③意思決定の場に参加できる

全員が集う会議では皆に意見を求め、意見を反映しようとする意思がある。

そこに、以下の要素が加わったことで、具体的な活動が始まった。

#### ④自らのニーズを見たとす、実現可能なアイデアが出される

広い畑一面にひまわりを咲かせることは話題と夢のあるアイデアで、農業従事者にとっては身近である。また、一面の花で人々を驚かせ、楽しませることは「やってみたいこと」である。

#### ⑤支援者・賛同者がいる

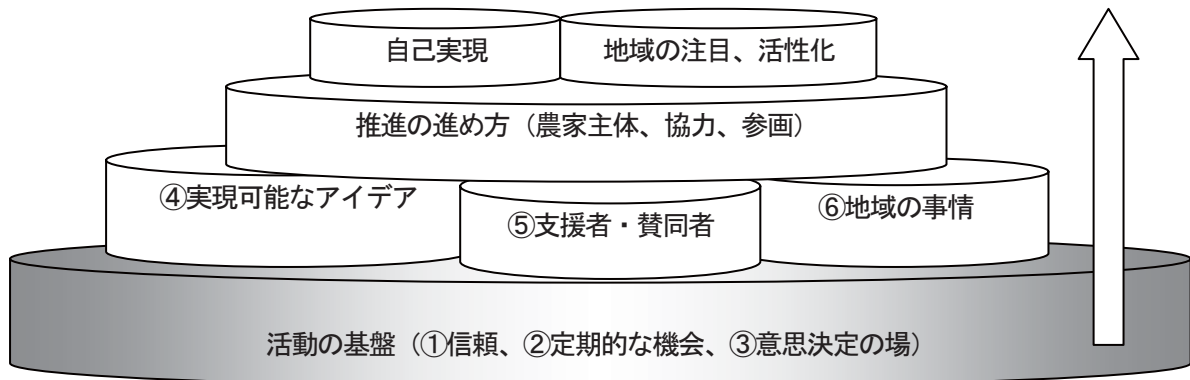
J A、大学、地域に、支援者が複数存在した。また、青年部のメンバーは作業に協力的である。

#### ⑥地域の事情がある

地域を元気にしたい理由があった。詳しくは後に述べる。

初年度の動きの中で、J A新村青年部のメンバーは各自ができることを提案し、お互いに活動に協力した。具体的には、土地の提供、用具の貸与、労働の提供などである。そして地域の支援者は、その動きを見つめながら必要に応じて関与した。それはひまわりの栽培情報、学生の参画、地域の周知、応援の声などである。まずは無理なく始めてみる、目標を具体的に絞り込みすぎない、という姿勢であったことが、主体となるメンバーにとっては取り組みやすさに繋がったと考えられる。

初めに「ひまわりの栽培」というアイデアがなければこの活動は始まらなかった。しかも、前年の事例という具体的なイメージが共有可能であり、栽培は農家にとって得意分野の作業であった。また、こうした活動を地域関係者が支援や賛同をし、常にアドバイスや見守りの関係性ができていた。そして地域活動と捉えた場合、「ひまわり」は誰もが関わりやすい素材である。きれいな花を咲かせることを共通のテーマとして、地域の商品開発、観光振興、障害者就労、環境保全などの課題に、多くの人が取り組むことができる素材である。



- ※・いつも仲良く集まる場所、という活動の基盤があっても、活動には結びつかない  
 ・アイデアがあっても、支援者の存在や、推進方法が分からなければ、活動には結びつかない

図-4 活動発起時の推進ピラミッド

### 3、活動の背景

物事の起こりには必然性と偶然性がある。そして、既存の価値が絶対的なものでなく、さらにもう一つの価値があるということをオルタナティブと呼んでいる。このプロジェクトの推進の潜在的な動機である「地域の事情」を考えてみると、農業のオルタナティブから派生したプロジェクトとも言える。ここで、こうした活動が起こった地域の背景と関係者について解説しておきたい。

#### (1) 地域の概要

松本市新村地区は、北アルプス槍ヶ岳を水源とする梓川が長い自然史の中で蛇行してきた扇状地であり、松本盆地の中央西寄りに位置している。土壌は西にそびえる火山である乗鞍岳・焼岳の火山灰と混ざり、平らな土地に広がっている。梓川の水は古来より早々と堰を設け各地に水路を整備し、この地区の農業用水として利用されてきた。長野県は寒冷で川筋に集落が開けた地形であるが、新村は安曇野とともに、稲の耕作地としては県内でも地形や土壌に恵まれた土地で、気候の持つ要素と、作付けの技術改革により、石高の高い水稻適地であった。昭和30年頃には全国一位を受賞した稲作名人が3名も排出されていたほどである。よって、地域の職業も稲作を中心とした専業農家が中心で、学校では大多数であった農家の子どもに合わせた予定が組まれるほどで、非農家の子どもは肩身が狭かった、と語る地域住民がいる程である。しかし、時代の流れとともに、稲作から畑作が奨励され、市場のニーズも変化していることから、現在の新村の主な農作物は、主に水稻、スイカ、花、麦などである。

また、新村地区は松本市街地から西に向かって安房峠を越える国道158号線の途中にある。長野自動車道の松本インターチェンジが市街地側にあり、その先には乗鞍高原、上高地、平湯温泉、飛騨高山、白川郷などの観光地が連なり、観光シーズンにはマイカーを中心に交通量が多いが、観光客の立ち寄りには少なく、移動の通過点となっている。

#### (2) 活動の関係者

次に関係者である。①はJ A松本ハイランド新村支部青年部である。多くの専業農家が所属するJ A（日本農業組合）には、松本盆地一帯を管轄するJ A松本ハイランドがあり、その中に新村支部がある。新村支部に所属する青年層20～40代の農業従事者をメンバーに31人（2011年）で青年部を構成し、全員が男性である。J A新村支部の職員が支援担当としてその事務局を務めている。月

一回もしくは隔月のタイミングで夜間に常会が開かれ、農業青年同志の交流会や地域行事への参加などが検討、情報公開されている。2011年現在の青年部の構成メンバーは多くが農家の出身で、大学に進学して専門的に農業を学んだ後にUターン就農をし、稲作だけでなく花・果物などの新分野や、酪農に積極的に参入し、流通に精通した新たな農業経営を実践する者がある。部員は年々、新旧の入れ替わりがいくらかあり、平均年齢は概ね30代に保たれている。

図-5

## 組織図

支部長 — 福支部長 — 会計、監事  
 — 農政部、営農部、文化部、後継部  
 — 地域役員

新村の農業は地域の概要でふれたように、水稻が主であった。しかし、水稻中心の国の農政が、時代と共により多様な農業の在り方へ移行する中、現代の農業は大規模に整理され、水稻以外の作物として、スイカやカーネーションなどの花の栽培が促進された。新村には専業農家が多いが、もともと農業人口がそれほど多くないうえに、花のむらとして起こした耕作支援も、担い手の高齢化によって農業人口は年々減少している。こうした背景が、JA松本ハイランド新村支部青年部のメンバーにとっては、将来の営農環境に対する潜在的な危機感であり、打開策としての一つのアクション、という事情に読むこともできるのである。

②としての関係者である松本大学は、商人の町松本で江戸時代に作られた私塾を起源とする学校法人・松商学園が設立した大学である。大学の前身である松商短期大学が新村地区の小学校跡地に移転された当時より、地域とは綿密な話し合いが行われてきた。設立当初から学生による「地域交流サークル」など、地域との接点も多い。松本大学は地域全体をキャンパスと捉えて、正課においてバスなどで屋外に出かける講義「アウトキャンパススタディ制度」や、地域の達人を講師とする「地域サポーター制度」などの独自の制度を持つ。大学の教職員は常時、新村公民館の活動や地域会合に出席しており、JA松本ハイランドの、とりわけ新村青年部との付き合いは、学生との畑での作物づくり、稲作などをおよそ10年以上にわたり行ってきた。最近では講義やゼミナール活動の中で、観光分野での農業体験や特産品開発、福祉と農業就労、防災、食文化発信などの様々な観点から連携を強めている。

初年度のひまわり作付けを行った土地は、翌年度に大学がスポーツグラウンドに整備した土地で、青年部に地権者を含む大学の借地である。グラウンド工事を前に、景観作物としてのひまわりの栽培をすることは、「花のむら新村」を広く印象付けるのに効果があった。

他の関係者として、③JA新村青年部を技術的・経営的にサポートするJA新村支部、④地域の交流・学習機能を持つ新村公民館、⑤松本電鉄の木造車両の移転をきっかけにできた地域の縁側「古い電車で新しい語らいの会」、⑥松本電鉄を運営するアルピコグループ、松本市、などが毎年この活動に協力している。こうした関係者が広がりつつある要因には、お互いに支え合い、地域の元気をいかに発信するか、という地域共通の想いがあるからであろう。

#### 4、2年目以降の展開と課題

##### (1) 2年目の課題

前年度の課題は大きく四つあった。一つ目は栽培計画の見直しである。2年目からは土地利用の事情から、一面20haの土地にひまわりを植えることができなくなるため、ひまわりを栽培する場所について新たに検討しなければならなかった。これは大学の借地と転作農地を合わせて、JA新村青年部が確保した。

二つ目は効果的なひまわり油の販売方法である。JAの売店のみでの販売は販路に限界があり、マーケットを模索する必要があった。これについては当面は各種イベントなどで随時販売することを試みた。他にも、ボトルラベルのデザインにはもう少し工夫が必要であった。

三つ目には油以外のひまわりの活用である。景観作物として、地域に花を咲かせ楽しんでもらうと同時に、ひまわり油の付加価値づくりや商品開発をし、より手の届きやすい形での商品を考える必要があった。大学では、①種を手で収穫した油と、機械収穫・機械搾り油の成分分析結果を比較実験し、②障害者就労として種の皮を手で剥く作業の効率について実験を行い、③大学生によるひまわりの種や油を使ったお菓子の商品開発が進められた。



図－6 社会福祉協議会にて障害者就労を実証実験



図－7 ひまわり油を使った商品開発

四つ目の課題は広報で、毎年変わる時期、場所についての情報をいかに伝えるか、である。2年目はA氏がブログを作成管理し、「新村ひまわりプロジェクト」として発信している。また別途、写真愛好家のブログ紹介や、観光スポットのブログ紹介、旅行雑誌や地元雑誌に掲載されたりと、プロジェクトは当事者以外の力によって、自由に発信されている。



<http://niimura.web.fc2.com/index.html>

図－8 「新村ひまわりプロジェクト」ホームページ

## (2) 2年目以降の展開

2年目の2010年は、3種類のひまわりを植えることとした。播種改革には大学生も関わり、搾油用、切り花用に加え、種食用の種類をレイアウトして植えた。6月中旬に機械撒きされ、9月上旬に開花するスケジュールで作業を行った。ハトの食害があったことで、一部のひまわりは植え直しをしなければならなかった。総じて天候は良く、土壌も安定しており、ひまわりは2年目も満開の畑となり、人々の目を楽しませた。搾油用ひまわりの収量も計画通りで、2年目は1年目の倍に当たる800本のひまわり油が生産できた。



図－9 学生による切り花ひまわりの手植え作業風景

課題となったことは、イベントの計画が一向に進んでいなかったことである。前月になって、慌ただしくイベントの企画が始まり、3日間の油の販売と直売コーナーを設けることになった。9月のイベントシーズンまでは農家は農繁期、大学は試験と夏休みということもあり、計画がなかなか進まなかった。しかし、付け焼刃のイベントも3日間にわたる学生の応援で、予定していた油は完売し、来客も多数あり、成果を残した。

その後、販売する油のボトルラベルのデザインは、J A新村青年部のメンバーO氏によって新しいデザインに一新された。ロゴも工夫され、手にとって買いたい商品の開発が進んでいる。大学では、前年度の商品開発により、学生が試作したクッキーが菓子店で製造され、店頭に並ぶことになった。3年目の播種計画は2年目と同様に3種類の種を撒くこととし、計画的にイベントも実施することとなった。また、ハトの食害対策として学生がポットでひまわりの種を植え、定植する方法が考えだされたが、こうした花を育てる行為がフラワーセラピーにつながらないか、新たな模索が続いている。

## 5、おわりに

地域の元気を誰が発信するのか。ここではそれが行政でなく、市民が主導であったケースを考えてみる。市民とは行政上では市に住民票を置く住民を指す言葉であるが、ここでは地域住民としての意味で市民を取り扱うこととし、実態のイメージがわかりやすいように、始めに具体的な市民像を挙げる。まず市民とは、乳幼児から青年期の子どもから高齢者まで全年齢層にわたる。職業や所属は様々な分野にあり、法人経営者、会社員・公務員（フルタイム・パートタイム）、自営業者、主婦、学生・生徒・児童、無職の人等であり、生活の時間帯や余暇のあり方はまちまちである。

市民は多様であるがゆえに同じまちで会っていても「知り合わない」ことも多い。一般的に日々の暮らしの中で頻度高くお互いが接する人は、第一に家族であり、同じ職業・所属の人であり、隣近所の住民、同じ場所に通う人など、生活の一部に関係がある人である。このような市民同士の出会いの場を具体的に想像すると、日中の就業・就学等と、家族との生活に1日の多くの時間が割かれ、特にそこでの人間関係が濃厚となる。したがって日々の人間関係では、お互いが得意とする能

力や分野が偏りがちな市民が多数派と考えられる。近年では、インターネット環境の普及により、ネット上での情報交換が盛んに行われるようになり、電波上で成り立つコミュニティは画期的な存在となった。しかし、個々の生活と複雑な地域事情が絡んだ地域活動においては、対面コミュニケーションが有効というのも事実で、顔を合わせる場なしでの地域活動の推進は難しい。そうした視点で、日頃のコミュニケーションの「質」が問われている。

初年度のプロジェクト立ち上げにあたり、ひまわりを咲かせるというアクションに至るまでには、J A 青年部のメンバーから懸念意見が多数あった。一方で、大学側では資金はともかく J A 青年部の実行力・継続力を見極めることに注視し、大学側から積極的にアイデアを提案するよりも J A 青年部の主体性を後押しする関係づくりに配慮し、アイデアを出すタイミングを周到に配慮した。地域活動において、大学や学生がリーダーや主体者になってしまうことで、活動が短期間で崩壊するというケースは多い。地域住民がリーダーであり主体者となることによって、息の長い活動が継続される可能性が高くなる。地域の公民館長もいつもこの活動を見守っていた。J A 青年部は長い議論の末、持ち出し金については補助金の可能性と、大学の協力など複数の可能性を想定しながらも、最後は自分たちでやってみよう、という思いで実施することに落ち着いた。

このプロジェクトの議論は時間をかけて、不安だという意見を持つ者も最後には納得するまで丁寧に行われた。後に振り返ると、この時にトップダウンで話が進まなかったことが、多くのメンバーの主体性を維持することにつながっているのではと思われる。これらのことについて、メンバー同士のコミュニケーション、とりわけ J A 新村青年部、大学や市、地域との交流が積極的に進められてきた。会議の出席率は高く、共同での懇親会など、活動の優先順位は下がることなく、現在に続いている。

このように、地域振興の内容が、実施者の自主的な一歩からスタートし、組織的に続けられる方向性が見えてきたところで、そろそろ戦略的に、ツーリズムと絡めた地域振興、農作物の新たな商品開発などを行いたい、という声もある。その成功のためには、より多様な力を持つメンバーがプロジェクトに参画し、しばらくは時間をかけて内部から発案・実行されるのが良い。この数年で見えてきた、できそうだという新たな手の届く目標の設定、相互の協力の2点を押さえることができれば、等身大のペースで物事を進めていくことがこのプロジェクトの成功への近道と考える。

## 謝辞

松本大学「地域共同研究助成費」より補助金をいただいて、この活動及び研究を行うことができました。深謝申し上げます。この報告書を書くにあたって、関係者である青年部の皆さん、J A 新村支部の元課長田中氏、松本大学の白戸洋教授に、心より御礼申し上げます。

## 【参考文献】

信濃毎日新聞社『信州学大全』、2004 P133-P136、P505-600

田中望・大谷晋也『まちおこしの風景』樫、1995 P157-166

阿部治・野田研一・鳥飼玖美子『持続可能な未来のための学習』有斐閣、2005 P265-288

関東農政局ホームページ